

五月より

泉鏡太郎

青空文庫

ごぐわつ
五月

卯うの花はなくだし新あらたに霽はれて、池いけの面おもの小さ濁にごり、尚なほ遅おそき櫻くらの
 影かげを宿やどし、椿つばきの紅にを流ながす。日ひ闌たけて眠ねむき合あ歡むの花はなの、其その面おも影かげ
 も澄すみ行ゆけば、庭にはの石いし燈とう籠ろうに苔こけや、青あをうして、野の茨ばらに白しろき宵よひの
 月つき、カタクと音おとづ信しんる、鼻はな唄うたの蛙かへるもをかし。鄙ひなはさて都みやこはもと
 より、衣きぬ輕ろく戀こひは重おもく、棲つま淺あさく、袖そで輝きらき風かぜ薫かつて、緑みどりの中なかの涼ひが傘さ
 の影かげ、水みづにうつくしき翡翠ひすゐの色いろかな。浮うき草くさ、藻もの花はな。雲くもの行ゆく方へ
 は山やまなりや、海うみなりや、曇くもるかとすれば又また眩ばゆき太たい陽やう。

ろくぐわつ
六月

遠近をちこちの山やまの影かげ、森もりの色いろ、軒のきに沈しづみ、棟むねに浮うきて、稚子をさなごの船ふね
 小溝こみぞを飛とぶ時とき、海豚いるかは群むれて沖おきを渡わたる、凄すこきは鰻うなぎ搔かく灯ともぞかし。
 降り暮くらす昨日きのふ今日けふ、千騎せんきの雨あめは襲おそふが如ごとく、伏屋ふせやも、館たちも、籠こもれ
 る砦とりで、圍かこまる、城しろに似にたり。時ほと、鳥との矢信やぶみ、さ、蟹かにの緋ひ、緘をどしこ
 そ、血ちと紅くれなの色いろには出いづれ、世よは只ただ暗夜やみと侘わびしきに、烈日れつじつ忽たちまち
 ひひごと、火かの如ごとく、窓まどを放はなち襖ふすまを排ひらける夕ゆふべ、紫陽花あぢさゐの花はな、花片はなびら一枚ひとつづ、
 くもほし、うつ、雲くもに星ほしに映をりる折ひとよ。うつくしき人ひとの、葉柳はやなぎの蓑みの着きたる忍しの、姿びすがた
 を、落人おちうどかと思みれば、豈あに知らんや、熱あつき情思おもひを隠ちらく顯ほたると螢ほたるに涼すず
 む。君きみが影かげを迎むかふるものは、たはれ男をとこの獺をそか、あらず、大沼おほぬまの

こひきんりん
鯉金鱗にして鰭の紫なる也。

しちぐわつ
七月

やま 山に、浦に、かくれ家も、世の状の露呈なる、朝の戸を開くよ
 ふすまじやうじ 襖障子の遮るさへなく、包むは胸の羅のみ。消さじと圍ふ
 たまたな 魂棚の可懐しき面影に、はらくくと小雨降添ふ袖のあはれも、
 おもかけ 魂棚の可懐しき面影に、はらくくと小雨降添ふ袖のあはれも、
 ひざかり やがて堪へ難き日盛や、人間は汗に成り、蒟蒻は砂に成
 はへ おとつぶて なり、蠅の音は礫と成る。二時さがりに松葉こぼれて、夢覺めて蜻
 んぼ はねかゞやとき 鈴の羽の輝く時、心 太 賣る翁の聲は、市に名劍を鬻ぐに似
 ところてん 鈴の羽の輝く時、心 太 賣る翁の聲は、市に名劍を鬻ぐに似
 うちみづ てふくおどろ 行 水の花の夕顔、納涼臺、縁
 て、打水に胡蝶驚く。

んだい 臺の月見草。買はん哉、甘いく、甘酒の赤行燈、辻に消
 ゆれば、誰そ、青簾に氣勢あり。閨の紅麻艶にして、繪團扇
 の仲立に、蚊帳を厭ふ黒髪と、峻嶺の白雪と、人の思
 は孰ぞや。

はちぐわつ
八月

つき 月のはじめに秋立てば、あさ朝顔の露はあれど、濡るゝとも
 なき薄煙、軒を繞るも早の影、炎の山黒く聳えて、頓て暑さ
 に崩るゝにも、熱砂漲つて大路を走る。なやましき柳を吹く風さ
 へ、赤き蟻の群る如し。あれ、聞け、雨乞の聲を消して、凄じ

く鳴く蟬なせみの、油あぶらのみ汗あせに滴したるや、ひとへに思おもふ、河海かかいと山岳さんかくと。
 峰みねと言いひ、水みづと呼よぶ、實げに戀こひびと人の名ななるかな。神しんならず、仙せんな
 らずして、然しかも其その人ひと、彼處かしこに蝶鳥てふとりの遊あそぶに似にたり、岨そばがくれ
 なる尾をの姫百合ひめゆり、渚なぎさづたひの翼つばさの常夏とこなつ。

くぐわつ
九月

宵よひ々の稻妻いなづまは、火ひの雲くもの薄うすれ行ゆく餘波なごりにや、初はつ汐しほの渡わたる
 なる、海うみの音おとは、夏なつの車くるまの歸かへる波なみの、鼓つづみの冴さえに秋あきは來きて、松まつ蟲むし
 鈴すず蟲むしの容かたちも影かげも、刈かる萱かやに萩はぎに歌うたを描ゑがく。野人やじんに蠟たうらう螂らうあり、
 斧をのを上げて茄子なすの堅かたきを打うつ、響ひびは里さとの砧きぬたにこそ。朝あさ夕ゆふの空そら澄す

み、水清く、霧は薄く胡粉を染め、露は濃く藍を溶く、白群
 やうの絹の花野原に、小さき天女遊べり。織きこと縷の如し
 玉蜻と言ふ。彼の女、幽に青き瓔珞を輝かして舞へば、山の
 端の薄を差覗きつゝ、やがて月明かに出づ。

じふぐわつ
 十月

君知るや、夜寒の衾薄ければ、怨は深き後朝も、袖に包ま
 ば忍ぶべし。堪へやらぬまで身に沁むは、吹く風の荻、尾花、軒
 廂を渡る其ならで、蘆の白き穂の、ちらくくと、あこがれ迷ふ夢
 に似て、枕に通ふ寢覺なり。よし其とても風情かな。折々の空

の瑠璃色は、玲瓏たる影と成りて、玉章の手函の裡、櫛笥の
 奥、紅猪口の底にも宿る。龍膽の色爽ならん。黄菊、白菊
 咲出でぬ。可懐きは嫁菜の花の籬に細き姿ぞかし。山家、村里
 は薄紅の蕎麥の霧、粟の實の茂れる中に、鶉が鳴けば山鳩
 の飮する。掛稻の香暖かう、蕪に早き初霜溶けて、細流に
 又咲く杜若。晝の月を渡る雁は、また戀衣の縫目にこそ。

じふいちぐわつ
 十一月

傳へ言ふ、昔越山の蜥蜴は水を吸つて雹を噴く。時、冬の初
 にして、槐の鶉は星に叫んで霰を召ぶ。雲暗し、雲暗し、曠野を

さまよふ狩の公子が、獸を照す炬火は、未枯の尾花に落葉の紅
 の燃ゆるにこそ。行暮れて一夜の宿の嬉しさや、粟炊ぐ手さへ玉
 に似て、天井の煤は龍の如く、破衾も鳳凰の翼なるべ
 し。夢覺めて絳欄碧軒なし。芭蕉の骨巖の如く、朝霜敷け
 る池の面に、鴛鴦の眠尚ほ濃なるのみ。戀々として、
 徊し、漸くにして里に下れば、屋根、廂、時雨の晴間を、ちら
 くと晝灯す小き蟲あり、小橋の稚子等の唄ふを聞け。(おほわ
 た) 來い、來い、まゝ食はしよ。

じふにぐわつ
 十一月

それ、おほみそかは大薩摩おほざつまの、もの凄すごくも又可恐またおそろしき、荒あらう
 海みの暗闇やみのあやかしより、山寺やまでらの額がくの魍まうりやう魍まうりやうに至いたるまで、
 雲みぞれを鍊ねつて氷こほりを鑄いつゝ、年としの瀬せに楯たてを支つくと雖いへども、巖間いはまの水みづは囁ささ
 きて、川端かはばたの辻占つじうらに、春衣はるぎの梅うめを告つぐるぞかし。水仙すゐせん薫かを
 浮世うきよ小路こうぢに、やけ酒ざけの寸法すんぽふは、鮫鰯あんかうの肝きもを解とき、懐手ふところの
 方寸はうすんは、輪柳わやなぎの絲いとを結むすぶ。結むすぶも解とくも女をんな帯おびや、いつも
 鶯うぐひすの初音はつねに通かよひて、春待月はるまちつきこそ面白おもしろけれ。

大正八年五月—十二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「五月《ごごぐわつ》より」とルビがついていますが、
ます。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

五月より

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>